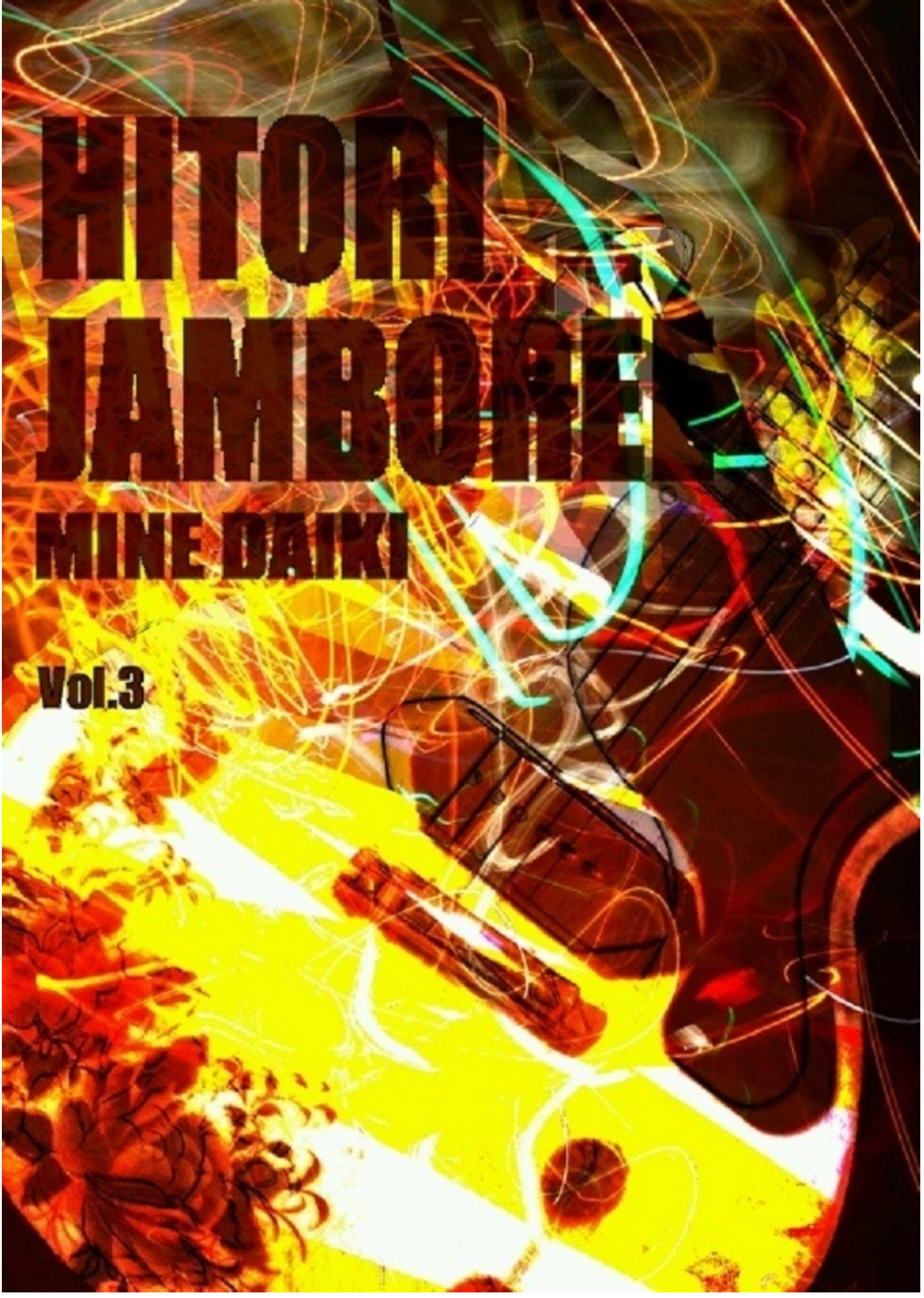
HITORI JAMBOREE

MINE DAIKI

Vol.3



目次

一、前口上
一、ＡＫＢがそんなに悪いのか!?
～ＡＫＢが嫌いな人のための
ＡＫＢ特集
一、アルバムレビュー
『Ｃｈｏｉｃｅ Ⅱ
ｂｙ ＮＯＮＡ ＲＥＥＶＥＳ』
一、無差別中古盤レビュー
エサ箱より愛を込めて…
一、後口上

　グローバル社会が進む中、固定概念やステレオタイプといった決まりきったものに対するマイナスの印象が付きつつある昨今でございます。そこからはみ出たものに価値を見出す社会とでもいいますか。またこれまでのデファクトスタンダードだったものが土地柄や出自や文化圏の違う人が混じり合いまうとそれまでの色が薄まってしまうこともありまして。言語が一番顕著でしょう。コンビニのバイト店員さんが「お釣り52円です。」というと社員さんから「何を言うてけつかるねん！お客様は友達か！」と罵声が飛んできて「お釣り52円になります。」という間違った謙譲語に直されるそうな。でもこの店長さんも「けつかる」言うてるくらいですから古き良き大阪弁を使っているんですがね。このように固定概念が間違った方向に変容する時というのは恐ろしいことですね。

　また「儲かりまっか」「ぼちぼちでんなぁ」やったり「名を九郎判官と申す」「義経、義経」だとかいう決まった相の手や会話パターンや言うのも伝わらなくなりそうです。これを言葉の乱れというのか、経年変化というかはそれぞれの価値観ですが、その内粋だとか江戸の風だとかいうもののは懐古主義だと思われてしまうかもしれません。もはや「けつかる」などは落語か岸和田近くでしか聞かれなくなった、上方落語の祖、米沢彦八の魂を受け継いでいる町、大阪からお送りしております、ひとりジャンボリー第３回目でございます。

　この日本人の中に潜在的に根付く意識の経年変化がブームやトレンドというものであれば、この移り変わりの激しさからしてかなり脆弱なものということになってしまいます。今回の特集は満を持してのＡＫＢ特集。ブームが続く状況の中でファンと同じくらいの数アンチが存在し、またＳＮＳの発展により「ＡＫＢツッコミ時代」に入りつつあるこのグループの悪しき部分の批判は否定しようもありません。しかしそこまでこのグループの音楽まで否定しようとする必要があるのか？ということです。確かに音楽を聴く以上そのアーティストの情報を排しては聴くことは出来ません。バイオグラフィを知ることでさらに味わい深く聴くことのできるプラスの要素は多分に受け入れたいものです。しかしＡＫＢ、またアイドルに見られる傾向として音楽外の情報により味わい深くなるどころか思考停止の拒否反応を起こしてしまうような、楽曲を聴く上でノイズとなる一面があるのです。

　そんなＡＫＢ・アイドルを包む「悪しき固定概念」に対する現状とアンチテーゼ、またメジャーなものを聴く人に向けて嘲笑することに対する惨めさなどを主張したミーハーとアングラの間を行く特集です。

　２本目の記事は先日9月23日に行われました私の受講した岡村詩野さんによるライター講座in京都で私が提出したＮＯＮＡ　ＲＥＥＶＥＳのアルバムレビューを指導を受けた上で加筆・修正したものを掲載いたします。そしてお馴染み「エサ箱より愛を込めて…」はＡＫＢが分量過多になっ

てしまったため今回は縮小版です。

　最近「ひとジャン」読みましたよと言ってくれる人が多く、これほどまでに嬉しいことはございません。また就職活動もろもろでの面接での自己ＰＲでもかなりのインパクトがあるようで、吹いて飛んでいくような場ではございますが継続することの大切さをひしひしと感じております。それでは参りましょう。

ひとりジャンボリーです!!!

アイドルソング評論という邪道

　２０１０年に発売されたシングル『ＲＩＶＥＲ』での本格的なブレイク以降、社会現象を引き起こし続けているＡＫＢ48。秋元康プロデュースの元、握手会、派生グループ、組閣、総選挙、じゃんけん大会などなどこれまでになかったギミックで爆発的な人気を獲得し、モーニング娘。を始めとするハロープロジェクトの人気に陰りが見えた00年代以降のアイドル冬の時代に終止符を打ち、様々なグループが再び群雄割拠するアイドル戦国時代を作り出した…という説明も不要なほどの現状である。しかしその国民的人気とは裏腹にあらゆる面での批判のやり玉にあげられているのもＡＫＢの特徴である。批判の対象になっているのはＣＤに握手券や総選挙の投票券を同封することでファンならば一人何枚も同タイトルＣＤの購入意欲を促すことに代表されるようなＡＫＢ商法である。ビジネスモデルとして定着させた功罪は確かにあるかもしれないが、ＡＫＢ発足前にも様々なアーティストが取っていた手法であるし、創世記からこのような形態を行っていたＡＫＢも批判されるようになったのはブレイクした10年以降でそれまでは現在のような嫌悪感を抱かせるほどには至っていなかった。これまでアイドルに全く興味の無かった大人世代から小中学生学生もが「ＡＫＢはやり方が汚いから嫌い」と言い始めたのである。

　またＡＫＢに始まったことではなく90年代以降アイドルグループが歌う楽曲は正当な評価が出にくい、音楽評論の対象に挙げられないという現実がある。これは曲が二次的な扱い、つまりアイドル本人に魅力を感じるのであって曲はあくまでアイドルを引き立てるモノだからという一般的なアーティストと、楽曲の果たす役割が違うことが根本の原因だろう。また楽曲に歌唱する本人の意思がない、歌唱力など実力の不問視、おニャン子倶楽部以降→モー娘。→ＡＫＢと脈々と受け継がれる大所帯である意味が楽曲において希薄、むしろノイズであるといった「アイドルの魅力」と「楽曲の魅力」における祖語がさらに音楽ファンがアイドルソングを敬遠し、他のアーティストと同じフィールドに並べることに対する嫌悪感・居心地の悪さを感じているのではないか。しかし、これまでもアイドルソングを音楽的に評することが全くなかったという訳ではない。近田春夫氏はＣＤの売り上げが頂点に達しようとしていた97年からＪ-ＰＯＰのみを扱う時評「考えるヒット」を週刊文春（文藝春秋社）で連載し現在も継続中であるし、ヒップホップグループ、ライムスターの宇多丸氏もハロプロ全盛期の00年からＢＵＢＫＡ（コアマガジン）にてアイドルソングのみを扱う時評「マブ論」を連載している。音楽評論と足りえるアイドルソング評論はこの２つのみという現状が00年代後半まで続いたのである。

冬の時代を終わらしたPerfumeをアイドルとして見るか？

　そんなアイドルソングを包むムードを払拭したのがPerfumeのブレイクである。03年のインディーズ時代の楽曲『スゥイートドーナッツ』以降全ての楽曲をCapsuleの中田ヤスタカがプロデュー

スし、これまでのアイドル楽曲＝アイドル自身を引き立てるもの、という概念を根底から覆しメンバー３人の声が判別出来ないほどにエフェクト処理を施した本格派テクノポップ路線を打ち出してアイドル冬の時代に風穴を開けた。宇多丸氏いわく「アイドル界最後の希望」とまで言わせるほどの期待を受け、見事に既存のアイドルファンだけではなく音楽ファンにも響いたのである。

Perfumeのブレイク～現在の位置に到達するまでにアイドル的な要素はほとんど感じられない。「ロッキングオンジャパン」や「音楽と人」に取り上げられ、数々のロックフェスに出演し、自然に広島のローカルアイドルからテクノポップユニットへ移行を果たしている。Perfumeのブレイクの数年後にＡＫＢのブレイクが起こるが、ＡＫＢの極端なまでにアイドル的（おニャン子、ハロプロの系譜を継ぐ）メソッドでのブレイクスルーにより、対比することで尚更Perfumeのアイドルらしからぬ面が強調されたという面もあるだろう。しかし現在いくつかのアイドルが音楽雑誌に掲載されるようになった地盤はPerfumeが開拓したとも言える。

「ＡＫＢ＝保守」に対する
他アイドルの挑戦的音楽性

何度も言うようにＡＫＢのブームの直接的な要因は楽曲の質の外にあるギミックの要素が大きいだろう。楽曲に目を向けてみると多くのシングル曲は現在のＪ-ＰＯＰのメソッドに乗っ取った極めて最大公約数的な作りが成されている。またキングレコードに移籍した09年以降シングルの打ち方は決まっており、

①2月～3月　桜ソング
②5月～6月　夏ソングかつ総選挙投票用紙配布
③8月　総選挙結果選抜メンバーによる楽曲
④10月　メッセージ性の強い楽曲
⑤12月　じゃんけん大会メンバーによる御褒美楽曲（10年より）

と楽曲のコンセプトまで同じでルーティーンになっている。さらに②と④のシングルの作曲者はＡＫＢの代表曲を多数作曲している井上ヨシマサが担当している。これも確かに市場におけるわかりやすさは絶大であるが、また多くの人にとって「毎年同じ時期に同じような曲が出される」という印象を与えかねないだろう。

このようにしてＡＫＢはあらゆるシステム化により強固な地位を築いたのだが、それに乗じたアイドルブームの流れで大量に出てきたグループはほとんどＡＫＢ的なシステムをとることが無く、徹底的なスキル主義、楽曲主義をとるものが多いのが特徴である。これまでも楽曲の良さに定評のあるアイドル（それこそモーニング娘。だってそうだ）はいたが、現在の状況が特異なのはＡＫＢがシステマティックな保守を取っているからこそ他の方向性をとっているという常

に「ＡＫＢありき」の動きなのである。

　直近のアイドル音楽性の問題についてはミュージック・マガジン10月号のフィード・バック欄に拙著の「音楽性で勝負するアイドル」という文章がコンパクトに掲載されているのでそちらの方も参照していただきたい。

　ＡＫＢの対立軸としてももいろクローバーＺ、東京女子流、リリカル・スクール（前名 テンギャル６）、トマトゥン・パインなどが登場し「音楽と人」や「ミュージック・マガジン」などでも大きく取り上げられ特集が組まれたり、レビューで大絶賛を受けることが出てきたのが今年に入ってからの状況である。楽曲主義が明確化したここ数年を総括するようにしてミュージックマガジン増刊として発売された「アイドル・ソング・クロニクル２００２～２０１２」は有名・無名、現在入手可能・不可能問わず３００曲のレビューが詰まっている名著である。

本質論

ＡＫＢの曲は聴く価値が無い？

　さて筆者の主観が混じりながらも時代背景を掴んでもらったところで本論である。ももいろクローバーZや東京女子流がアイドルに対する違和感を払拭しつつあるのに対し、「商法が嫌だから、保守だから、またアイドルだから曲聴かない」という負のバイアスを未だに一身に背負っていることに違和感を持っているのである。確かに保守的な曲はつまらない、だか派生ユニット・グループを含め３００曲を超える楽曲の中には非常に味わい深いものも存在する。

　しかし多くの曲数の中でＡＫＢに対する負のイメージを払拭するほどの名曲を探すことは非常に骨の折れる作業だろう。　これまでのひとジャン過去２号、「エサ箱より愛を込めて…」の中でVol.１ではＳＫＥ48『ごめんねＳＵＭＭＥＲ』、Vol.２ではＡＫＢ48『真夏のＳｏｕｎｄｓ　ｇｏｏｄ！』及びカップリングの『ちょうだい！ダーリン』を取り上げたが、これも一つの入り口となる名曲である。そちらも参照していただきたいが、今回は特集という形でＡＫＢにおける名曲を紹介し「これは悪くない！」と思っうことがあれば幸いである。「ＡＫＢが嫌いでも楽曲まで嫌いにならないでください」。そういう思いで本項を記した。

参考文献

・ライムスター宇多丸の「マブ論 ＣＬＡＳＳＩＣＳ」 アイドルソング時評 ２０００～２００８
宇多丸　（２００８）　白夜書房　刊

・「音楽性で勝負するアイドル」 ミュージック・マガジン10月号 P.223
峯大貴　（２０１２）　ミュージック・マガジン　刊

・ミュージック・マガジン増刊 アイドル・ソング・クロニクル２００２～２０１２

吉田豪、原田和典、南波一海（２０１２）　ミュージック・マガジン　刊

ＡＫＢ名曲レビュー

作詞は全て秋元康

『曲名』

①作曲者

②編曲者

③歌唱

④収録シングル・アルバム

⑤発売年度

『Ｂａｂｙ！Ｂａｂｙ！Ｂａｂｙ！』

①上杉洋史

②ＣＨＯＫＫＡＫＵ

③ＡＫＢ48

④９thシングル

　２ndアルバム「神曲たち」

⑤２００８年

　メジャー通算９枚目のシングルに数えられているが実際はこれまで所属していたデフスターレコーズとの契約が切れ、次の所属が決まらないままの発表だったために、配信限定となってしまったＡＫＢ史上最も不遇な時代の曲。２０１０年の「神曲たち」に収録され、容易に手に入るようになったが、『Ｂａｂｙ！ Ｂａｂｙ！ Ｂａｂｙ！ Ｂａｂｙ！』と改題され歌唱メンバーも変わっている。

　環境としては恵まれていないが、楽曲としては分厚いシンセブラスと時折ワウも交えた細かいギターフレーズ、後ろで延々リピートされる電子音が鳴る非常に凝った90年代王道サマーソングの様相。これも真心ブラザーズ『エンドレス・サマー・ヌード』、Ｖ６『愛なんだ』、嵐『ＷＩＳＨ』などのアレンジも手掛けるＣＨＯＫＫＡＫＵ氏の功績だろう。

　トラックの緻密な重厚さに反して坦々とした野宮真貴のような歌唱でソロパートも無い全編ユニゾンというこのズレが独特のアーバンチックな雰囲気を醸し出している。この後キングレコードと契約しＡＫＢ48という存在を全国に知らしめるきっかけとなった『大声ダイヤモンド』が発売される。そういった意味でも「売れる」ための模索を図った結果の名曲。

『週末Ｎｏｔ　ｙｅｔ』

①阿部純

②鈴木大輔・斎藤悠弥

③Ｎｏｔ　ｙｅｔ

④Ｎｏｔ　ｙｅｔ　1stシングル
⑤２０１１年

　大島優子、北原里英、指原莉乃、横山由依によるユニットのデビュージングルでカッティングギターが冴えるシティポップナンバー。タイム感を押し出すとそれこそ竹内まりややＥＰＯといった80年代のオールド感が出てくるのだが、歯切れよいブレイクと前のめりなビートにより古臭ささを感じさせず、アイドルソングとして昇華されている。デビュー前までは大島優子が一世代下のメンバーを連れたワンマンユニットになるかとも思われたが（当初は大島も結成を相当渋ったらしい）、この曲で最も存在感があるのは横山由依による高音パート。そもそも高音成分の多い横山が感情の起伏の無い声色で歌っているのが心地よさを生んでいる。この半年後に出たソロでは声量の無い鼻にかかった声が意外にアリ！との評判を呼んだ指原はここではあまり主張が少ない。
　本家ＡＫＢよりアクティブなパフォーマンスと上質なポップスを意識したユニットだと期待していたが、当曲以降は微妙な距離感の男女という歌詞世界は踏襲したまま、音楽性は元気のよい凡庸Ｊ-ＰＯＰになってしまったところが残念でたまらない。

週末Not yet / Not yet - YouTube
http://youtu.be/GbcUsi8T4Rs

『涙のシーソーゲーム』

①松本俊明
②中西亮輔
③アンダーガールズ
④17thシングル「ヘビーローテーション」c/w
⑤２０１０年

　ＡＫＢ全楽曲の中でも屈指の知名度を誇るヘビロテこと『ヘビーローテーション』…のカップリングであるこの楽曲。２０１０年度の総選挙第１位～21位までがヘビロテを歌い、22位～40位までがアンダーガールズとして本楽曲を歌う。よってセンターは22位の多田愛佳。モータウンビートを取り入れている楽曲に駄曲はない、というある種フェチと化しているリズムであるが、Ｄの音をスタッカートで鳴らすベースから始まるこの曲もその例外ではない。メロディこそ90年代ビーイング系、織田哲郎を思わせるキャッチーなメロディだが、それがこのビートに載ると歌謡曲的な古さを醸し出してくるから不思議だ。
　このレトロ感はＰＶで全開になっている。ドン・コーネリアスが司会を務めたアメリカの代表的音楽番組「ＳＯＵＬ　ＴＲＡＩＮ」をパロディにした番組でスプリームスのような格好をしたメンバーがパフォーマンスするという内容なのだが、メンバー以外出演者は全員黒人、出番前に歌っていたアーティストがジャーメイン・ディクソン（ジャーメイン・ジャクソンのことだろう。

なぜジャーメイン!?ジャクソン５がモータウンを離脱する時も一人残ったからか!?）、番組名も「ＳＯＵＬ　ＴＲＡＩＮ」ではなく「ＳＯＵＬ　ＰＯＷＥＲ」（モハメド・アリの“キンシャサの奇跡”の前に行われたジェイムス・ブラウン、Ｂ・Ｂキングなどのアフリカン・アメリカン・ミュージシャンが出演した「ザイール74」というコンサートを追ったドキュメンタリー映画のタイトル）などなど様々なところにアメリカン・ブラックミュージック要素が盛り込まれている。振付もスプリームスやロネッツのような黒人ユニットっぽいのだが、リズムの取り方などが慣れないのかかなりたどたどしいのがまた面白い。

　この曲以降１年に１曲のペースでシングルのカップリングにブラックミュージックを取り入れた楽曲が入ってくるようになり（11年「これからＷｏｎｄｅｒｌａｎｄ」（次項で紹介）、12年「ちょうだい、ダーリン！」（Vol.２で紹介））そういう面でも非常に意味ある楽曲である。

参考音源
【PV】 涙のシーソーゲーム/ AKB48［公式］ー YouTube
http://youtu.be/U1_7sqZa0wk

『これからＷｏｎｄｅｒｌａｎｄ』

①井上ヨシマサ
②井上ヨシマサ
③ＡＫＢ48
④21thシングル「Ｅｖｅｒｙｄａｙ、カチューシャ」c/w
⑤２０１１年

　（今のところ）ＡＫＢブラックミュージック三部作の二作目。前作がモータウン調とすれば今回はビージーズやアース・ウィンド・アンド・ファイアー、クール・アンド・ザ・ギャングばりのディスコ・ファンクサウンドである。

　もったりとしたビートに遊びのあるホーン、ピアノパートが乗りさらに要所要所で合いの手を入れてくるコーラス隊。ディスコサウンドらしくかなり隙間を生かした音の鳴らし方だが、それに対して彼女たちによる歌唱は不思議と淡々としている。しかし歌での唯一の遊びポイントが３回目のＡメロ“心のどこかに忘れてるだけ”の後かすかに「a…an」という声が聴こえる（おそらく篠田麻里子によるものだと思われる。）。

　作曲・編曲は『大声ダイヤモンド』や『Ｂｅｇｉｎｎｅｒ』などＡＫＢの核となる重要曲を数々手掛けている井上ヨシマサだが、彼のＡＫＢ仕事での特徴（というか秋元康からの要望）とも言える最初の音から盛り上がる印象的なイントロ、ＭＩＸが打ちやすい（ファンがする掛け声）という要素が意図的に排されている。ＢＰＭも１１２ほどでディスコサウンドの代名詞的曲ビージーズの『ステイン・アライヴ』が１０４、８０年代ダンスミュージックの代表曲マイケル・ジャクソン『ビリー・ジーン』やプリンス『アイ・ワナ・ビー・ユア・ラヴァー』が１１７、

アイドルによる四つ打ちの名曲タンポポの『恋をしちゃいました』が１２６であることからもわかるようにバラードでは無い曲としてはかなり遅くもったりとしていて、アイドルソングとしては盛り上がりにくいということがわかるだろう。しかしこの実験的取り組みがＡＫＢ屈指のダンスミュージックの名曲として刻まれている。

【PV】 これからWonderland ダイジェスト映像/AKB48[公式]- YouTube
http://youtu.be/0-TwpA5U80o

『泣ける場所』
①鶴崎輝一
②野中“まさ”雄一
③ＤＩＶＡ
④18thシングル「Ｂｅｇｉｎｎｅｒ」c/w
⑤２０１０年

チームによる劇場公演を主軸にライブを行っているＡＫＢはＣＤに収録されている歌唱メンバーでライブもやることは少ない。それぞれのチーム公演ではそれぞれの公演曲を歌うのだが、選抜メンバーで歌われるシングルの曲郡はそうはいかない。チームＡの公演に大島優子はいないのである。だから多くの人で歌いまわすためにＡＫＢの楽曲は個人がこの曲を・このパートを歌う必然性は極端に排されていることも特徴であり、メンバーの個性を活かした曲は派生ユニットやソロに任されている。

この曲が発売される前年の09年にメンバー増員したＥＸＩＬＥのように歌唱メンバーとダンスメンバーを分けたことで「Ｊ-ＰＯＰ的」アーティスト感を押し出したユニットＤＩＶＡ。このように言うと揶揄しているようなのだが、本曲においては「歌唱メンバーの実力によって名曲に仕上げた」ＡＫＢの中でも稀有なタイプの曲なのである。

楽曲としては正統派歌モノバラードであり、歌を聴かせるためにバックトラックの音が薄くメロディの運びや感情の表現が難しく、単に選抜外のアンダーガールズとして歌っていればお粗末になっていたはずだ。

シングル収録曲では初のセンターである秋元才加の大人びた声で異常なほどの気合が入った歌いっぷりが伝わってくる。１番のＡメロ秋元→倉持と直球にウマい二人の後に歌う佐藤亜美菜の甲高い声優声が聴こえてくるのも面白い配置だ。

ソロとしてメディアでは露出の機会が多いがＡＫＢ内では活躍の場がなかなか与えられない秋元を始め、佐藤亜、佐藤夏希、歌唱力はＡＫＢの中でもトップと言われていた増田有華、当初大島優子と共にＫのトップメンバーであったがケガによる長期離脱でチャンスが回ってこなかった梅田彩佳などＡＫＢを初期から縁の下で支えてきたメンバーの実力と曲にかける熱量が最も押し出されている楽曲である。

その後、秋元、梅田、増田は宮澤佐江を加えてダンス＆ヴォーカルユニットＤｉＶＡを結成す

るが、90年代ＴＫサウンドを彷彿とする（実際１stシングル「月の裏側」のカップリング『インフォメーション』は小室哲哉の作詞作曲編曲）楽曲はこの『泣ける場所』よりも少し難しくなってしまっている印象。

アルバムレビュー『Ｃｈｏｉｃｅ Ⅱ ｂｙ ＮＯＮＡ ＲＥＥＶＥＳ』

２０１２年もそろそろ佳境に差し掛かっているが、今年の音楽の潮流としては昨年の東日本大震災以降、音楽性によるトレンドの変化やニュースターの登場よりも音楽を取り囲む社会的基盤・システムの変化、また音楽という行為の意味の再考など文化的・社会的問題の方に目を向けるような状況が続いているのではないだろうか。東北復興支援イベント、反原発音楽フェス、音楽著作権法改正、風営法の規制強化など音楽を楽しむためには考えることを避けては通れないが、音楽に乗っかる意味の重さ・多さに時折バテてしまう。なので逆にこの風潮は意味的なものから解放された純粋な音楽の楽しさを再考・追求した作品が多く出ることにもなったのではないだろうか。

その中で西寺郷太(vo)率いるポップバンドＮＯＮＡ ＲＥＥＶＥＳの「Ｃｈｏｉｃｅ Ⅱ」は音楽における純粋度でいえば今年最も高かったアルバムの一つである。

西寺はマイケル･ジャクソンに関する著作や、「小島慶子キラ☆キラ」（ＴＢＳラジオ（現在は終了））内での音楽コラムを担当するなどポップミュージックの伝道師としての一面でも有名であり、ノーナの音楽性もマイケルやワム！、プリンスといった80年代ポップミュージックから色濃く影響を受けたものである。本盤はビルボードレーベルからリリースされたカバーアルバムシリーズ第2弾であり彼らがまだ10代であった80年代～90年代を彩った洋楽ナンバーを中心に８曲が選曲されている。

マイケル・ジャクソンの③『ヒューマン・ネイチャー』やマドンナの⑧『クレイジー・フォー・ユー』などの80年代ポップレジェンドの代表ナンバーはまさしくノーナのオハコである。本人たちが今この曲をステージでかけるとしてもこのアレンジになるのではないかというほど、原曲の世界観を１ミリもずらすことない理解度でノーナの色に染め上げている。アメリカの男性アイドルグループ、ニュー・キッズ・オン・ザ・ブロックの②『ステップ・バイ・ステップ』は近年Ｖ６のプロデュースも行っている西寺にして最高のアイドルソングと言わんばかりの思い入れのある歌唱を聴かせる。間奏終わりのソロパートで原曲では５人のメンバーがそれぞれ歌い繋いでいくところも西寺がそれぞれの特徴を捉え、全て一人でやっているところはミュージシャンというよりも一人のポップ大好き少年に戻っているようなはしゃぎっぷりだ。

僅かなサポートなどを除いて演奏は全てノーナのメンバー３人とプロデューサーの冨田譲の４人のみでなされている。確かな演奏力を誇るプロのミュージシャンたちだが、ここに収録されている音からはかつて軽音サークルのコピーバンドでカバーしていたものの実力も機材もなく満足いかなかったが、10数年の時を経て納得出来るようなものが出来たというような10代の延長線上にいるような純粋でキラキラしたものが聴こえる。

また西寺による１曲ごとの詳細なライナーノーツが付いているので、今の10代音楽ファンにと

ってもこれらの曲に対するノーナの熱量が伝わるだろう。一聴した時に「アメリカのエイティーズポップだね。」と曲を理解出来てしまうことは、たくさんの音楽聴いた経験を積んだ証として嬉しくもあるが、同時に10代の時のようなまっさらな気持ちで調べながら聴くことがもう出来ないことに寂しさを感じる。曲情報だけではなく西寺本人の思い出も交えているのでそんなことも考えてしまうライナーだ。

　我々の聴く音楽の大部分は商業音楽なのである。音楽をするということがビジネスにならなければやっていけないのである。しかし視聴者は音楽に商業性を求めないし、アーティスト側も音楽を始めた当初は商業音楽として消化されることを躊躇っていた時期もあるだろう。そんな矛盾を抱えることで音楽は成り立っている。だからせめて音楽を聴いている間だけでも純粋な気持ち、社会の厳しさも音楽システムも知らない青春時代の気持ちを取り戻したいのである。

　社会に疲れたのならば気分を変えて音楽を聴けばいい、音楽を聴くことにも疲れてしまったのならば音楽を好きになった頃を思い出してみればいい。純粋に音楽を楽しむということをもう一度思い出すにはこのアルバムが一番の特効薬となるのではないだろうか。

「Ｃｈｏｉｃｅ Ⅱ ｂｙ ＮＯＮＡ ＲＥＥＶＥＳ」
ＮＯＮＡ　ＲＥＥＶＥＳ
ＢＩＬＬＢＯＡＲＤ ＲＥＣＯＲＤＳ
ＨＢＲＪ-１００３
２０１２／６／６

『ロックンロール、やってます』

友部正人と三宅伸治
ＴＭオフィス
ＴＭ－０１４
２０１０／２／７

70年代からフォークシンガー、詩人として活躍し「日本のディラン」との呼び声も高い友部正人と忌野清志郎の愛弟子で数々のアーティストから絶大の信頼を受けるギタリスト、シンガーである三宅伸治の二人が09年夏に行ったライブの模様を収録した一枚。

収録されている12曲は『一本道』、『大阪へやって来た』、『はじめぼくはひとりだった』などの友部の代表曲もあるが、『地球のいちばんはげた場所』はこれまでライブ盤にしか収録されていなかったし、作詞友部・作曲三宅の『曇り空』、『久しぶりの街』、『不思議な人生』は今回初収録と曲目としても見逃せない内容である。

一部リズムマシーンを用いている楽曲もあるが、全曲二人の弾き語りで、『反復』、『君が欲しい』などは三宅によるブルースロックアレンジがなされている。観客の声も時折聴こえ、まったりと二人の歌に酔いしれている雰囲気が伝わってくる。

正直なところ二人の息はぴったりというよりも激しくぶつかり合っている。たまに三宅が友部を窺いながら演奏している様子もある。しかしここでの友部の歌は本当に魅力的だ。どんなにメロディアスな曲を歌っても語りかけるように聴こえてしまう不思議な声は一番の魅力である歌詞を聴くのに最適である。メロディが備わっていない言葉には強力なリズムだけが残っている。だから二人でハモっている部分もあるのだが、音としては正しい和音でもハモるというよりも２人で同じ詩を朗読しているという方が近い。

聴いた後には強烈な歌詞の響きが残っている。70年代に活躍したフォークミュージシャンの多くが当時の歌を歌うライブばかりで新曲の制作をしなくなっている中で60代を迎えてなお純粋な円熟味を持って新曲を制作し、下の世代とも密に交流する友部の近年の様子を知るならば最良の一枚である。峯田和伸や七尾旅人など現在の音楽シーンを象徴するようなアーティストからもリスペクトを集めるその所以がわかるだろう。

参考音源
反復 友部正人と三宅伸治-YouTube
http://youtu.be/vwdhqh16zc8

後口上

　ひとりジャンボリーVol.３最後までお付き合いいただきありがとうございました。
　先日9月22日に行われたくるり主催の京都音楽博覧会に行ってまいりまして、見てきました「音博名物ヒトリジャンボリー」。普段バンドでやっている人達も一人の弾き語りで演奏するコーナー。おそらく会場である梅小路公園に京都水族館が今年から出来、そこでのイルカショーにより音を止めなければいけないので転換のしやすい形式ということもあるのでしょう。一人２～４曲でサイクルが早く入れ替わり立ち替わりで出てくるのは圧巻でした。ハイライトはヒートウェイヴの山口洋。気持ちよくギターソロを弾いていたところ、持ち時間が短いことを思い出しハニカミながら歌へ戻った『トーキョーシティヒエラルキー』、時間が無く1番のサビまでの披露でしたがもはや日本のスタンダードナンバーにもなりつつある『満月の夕』は特に素晴らしかった。さらには長年岸田繁との不仲説もささやかれていた後藤正文。岸田とのコラボで歌われた『ハイウェイ』でのハモリには会場全体から思わず感嘆譜が漏れていました。

　という訳で存分に楽しませていただきました。ですが、考えなくてはいけないことはこの雑誌はこのまま「ひとりジャンボリー」でいいのかですよね。最近ツイッター上では「ひとジャン」と呼ぶことも多いのでこっちを正式名称としても構わないのですが…来年も音博で「ヒトリジャンボリー」が継続するようでしたら考えなくてはいけませんね。

　さて、今回は表紙がえらくしっかりオシャレでかっこいいデザインとなっております。Vol.２で私が描いたフォークミュージシャンの名前をただ書き連ねるというものとは全く違いますね。アングラ臭がない。今回の表紙は京都の現役美大生であり私の高校時代の後輩でもありますりんちゃんこと、家田直子さんに書いていただきました。このデザインに使われているギブソンレスポールJrは私の所有する物でございます。私の個人的な雑誌の表紙デザインを快く引き受けていただいた彼女に多大なる感謝を。

　今年の12月から私の就職活動が本格的に始まりまして次号はいつになるかはわかりません。しかし２０１２年度のベスト的な企画はしたいですね。出来る限り続けていきたいと思っていますので皆さまからのご支援、ご愛顧のほどをすみからすみまでずずずいと御願い申し奉ります。今回も本当にありがとうございました。

ＨＩＴＯＲＩ　ＪＡＭＢＯＲＥＥ
Vol.３
２０１２年10月9日発行
著者・発行人　　峯　大貴
表紙協力　　家田　直子
価格　　０円
峯　大貴ツイッターアカウント

https://twitter.com/mine cism